

# “姫路城を調べる”に王道なし



姫路市内在住の主婦が『わたし達の姫路城』という書物を自費出版されました。黒田純・中野みゆき・森谷瑛子の3氏が執筆、三木齊氏が写真撮影を担当して編集されたもので、「用語集」を除いて230頁に及ぶ大部な本に仕上がっています（上の写真が表紙）。

本の内容は、姫路城の概説とその調査に大きく分かれます。前者については、各種の参考文献をまとめたものになっています。後者はこの本の価値を決定づけたい重要な部分です。著者が疑問に思ったことについて、「数える」ことにこだわって、実際に数えてみた結果を掲載しているのです。一見すると単純極まりないかのように思われるでしょう。しかし、こうした基本的なことを真摯に調べた結果は意外なことに公になっていません。

彼女達の仕事は、これから姫路城を調べたり研究する上で無視できないことでしょう。

自費出版のため発行部数が少ない。姫路市立城内図書館、国会図書館、城郭研究室に架蔵しているので、そこで閲覧できる。

姫路城を研究する上でバイブル的な書物がいくつかありますが、そのうちのひとつが加藤得二氏の著書です。加藤氏は「姫路城昭和の修理」において工事主任として工事を指揮された方で、まさに「姫路城の生き字引」とも言える方でした。彼の著書に『姫路城昭和の修理』（真陽社、1965）があります（のちに名著出版の日本城郭叢書として刊行）。その60頁に、はノ門の説明が以下のように記載されています。

**門扉の上方には二階床面に設けた隠し石落しがあって、城門にせまった敵を防ぐ装備をもち、石畳で囲んだ凹地に建つので、有時の際は土砂で通路を埋立て、外敵の侵入を防ぐ考慮がはらわれている。**

『わたし達の姫路城』の著者は、赤字部分の記載は本当かどうか確認しています。その結果は写真のように石落しは存在しませんでした。加藤氏の記述だけに、これを読んだ人の多くは「はノ門には隠し石落しがある！」と信じたことでしょう。このような事例が1つでもあったとなると、加藤氏の記述についてすべての確認が必要となります。彼女たちの仕事はこうした疑問から始まっています。詳しくは同書を読んでいただくとして、彼女たちは『修理工事報告書』に掲載されている図面と現存する建物とを比較し、狭間の有無に相違があることなども見つけています。



はノ門内部床面（石落しは無い）



はノ門同様に調べると、にノ門にも無い  
（にノ門について加藤氏は石落しの存在は明記していない）

以上はほんの一例です。同書の「姫路城の細部を数える」は単に結果の羅列にしかかたっていないかのように見えますが、「ものを調べること」の基本を忘れていません。自分の足を使い、自分の目で確認する一地道で疲れる仕事ではありますが、最も重要な仕事です。現在の日本社会が「効率化」の名のもと、すっかり忘れてしまっていることです。そういう意味では、姫路城の調査研究に携わるわれわれにとって、この本の登場は非常に刺激的なこととなりました。

ぬノ門の隠し石落しを内部から見る。幅広の通路をカバーするため、全体が長く、そのため蓋が数分割されている。ところが、蓋を開けるための把手が無いものがあることに気づいた（点線部分）。「これで実用的と言えるのか」という疑問が湧いてくる。姫路城の評価が変わるかもしれない。

